

jFUNU Newsletter

公益財団法人 国連大学協会
 〒 150-8925 東京都渋谷区神宮前 5-53-70
 TEL 03-5467-1368 FAX 03-5467-1349
 URL <http://www.jfunu.jp/> E-mail jf@unu.edu

- 大学院が第2回修了式を実施 P1
- 2013年度大学院入試状況 P2
- 東京渋谷ロータリークラブが来訪 P2
- トヨタの自動車工場を見学 P2
- jFUNU レクチャーシリーズ7を発刊 P3
- UNU アクティビティレポート P4

国連大学大学院が第2回修了式を実施

7月3日(水)、国連大学大学院「サステナビリティと平和研究科」(UNU-ISP 修士課程)及び「環境ガバナンス生物多様性研究科」(UNU-IAS 修士課程)の第2回修了式が国連大学本部3階のウ・タント国際会議場で開催されました。今年の修了生は、UNU-ISP 修士課程が11名、UNU-IAS 修士課程が2名でした。

式典では、はじめに武内和彦 UNU 上級副学長・UNU-ISP 研究科長が「修了おめでとう。しかしこれからが本当のスタートです」と挨拶。続いて海外出張中のデイビッド・マローン学長が、ビデオメッセージで学生たちを祝福しました。

引き続き、黒川清政策研究大学院大学アカデミックフェローが特別講義を行い、自身の留学経験を語りながら、学生たちの門出に際し、励ましとはなむけの言葉を贈りました。

そして、13名の学生一人ひとりに武内副学長より修士の学位記と記念品が授与されました。

その後、jScholarship 特別賛助会員として、学生たちの修学生活をサポートしてくれたトヨタ自動車株式会社、住友化学株式会社、パナソニック株式会社の代表の方々に、武内副学長並びに長谷川善一 国連大学協会(JFUNU)専務理事(吉川弘之 JFUNU 理事長の代理)より、感謝状が手渡されました。なお JFUNU 森茜常務理事から学生全員に団扇のおみやげが贈呈されました。

最後に、UNU-ISP 修士課程の「地球変動とサステナビリティ」「国際協力と開発」「国際平和と安全保障」の各3分野の修了生の代表が、修士論文のエッセンスをスピーチして修了式は終了しました。

場所を2階ホールに移して行われたレセプションでは、入学から修了までの2年間奨学金を受給してきたアレキサンダー・イムボさんからパナソニック株式会社の星亮ブランドコミュニケーション本部CSR・社会文化グループコーポレート統括室事業推進東京担当リーダーに、またティヤナ・カイトビッチさんから長谷川 JFUNU 専務理事にお礼状が手渡されました。



特別講義を行う黒川政策研究大学院大学アカデミックフェロー



武内上級副学長と長谷川 JFUNU 専務理事から住友化学株式会社の福田氏へ感謝状が渡された



レセプション会場で修了生のイムボさんとカイトビッチさんからお礼状がパナソニック株式会社と JFUNU へ

2013 年度の出願者数は 538 名 UNU-ISP 修士課程

2013 年度 UNU-ISP 修士課程の入学試験が終了しました。修士課程は合計 538 名の出願のうち 11 名が合格、また博士課程は 83 名の出願者があり、そのうち 2 名が合格しました。

<修士課程>

● 入学出願者地域別

アフリカ	352 名 (30 カ国)
中南米	16 名 (10 カ国)
オセアニア	2 名 (2 カ国)
中東	32 名 (6 カ国)
アジア	110 名 (18 カ国)
ヨーロッパ	18 名 (12 カ国)
北米	8 名 (1 カ国)

● 合格者国別・性別

米国：男 1 女 2 / インド：女 1 / オランダ：女 1 / ガーナ：女 2 / ケニア：男 1 / 日本：男 1 / フィリピン：女 1 / ホンジュラス：男 1

<博士課程>

● 入学出願者地域別

アフリカ	28 名 (9 カ国)
中南米	2 名 (2 カ国)
中東	20 名 (5 カ国)
アジア	28 名 (9 カ国)
ヨーロッパ	4 名 (4 カ国)
北米	1 名 (1 カ国)

● 合格者国別・性別

ガーナ：男 1 / ナイジェリア：男 1

■ 東京渋谷ロータリークラブの一行が国連大学を訪問

6 月 10 日午後、東京渋谷ロータリークラブから 10 名の方が国連大学に来訪されました。東京渋谷ロータリークラブは 2001 年に創立されたクラブで、渋谷地域にあるロータリークラブとして、地元の老人ホームに資材を寄贈したり、カンボジアの病院への救急車の寄贈、さらに青山学院ローターアクトクラブへの支援活動など地元根付いた地道な運動や国際的な援助活動など各種の奉仕活動を積極的に展開しています。今回、地元でありな



がらよく知らないままでした国連大学を実際に見てみたいという目的で来訪されたものです。

一行は本学到着後、10 階会議室へ。早速、森茜国連大学協力会常務理事・事務局長から「国連課題と国連大学の活動」と題して国連と国連大学の関係や国連大学及び国連大学協力会の活動目的、使命についてプレゼンテーションが行われた後、秋葉正嗣 UNU-ISP 大学院事務局長が国連大学大学院の近況を報告しました。

その後、国連大学本部ビル内の見学ツアーに出発。最初に 6 階ラウンジで UNU-ISP 大学院生との懇談に臨みました。懇談に出席した学生はベンジャミン・マイアン

グワさん、ニシレ・コスマス・ムワイスンガさん、ンゴック・マイ・キムさん、ヤウ・アジェマン・ボアフォさんから 4 人。学生たちの自己紹介が終わるとロータリークラブのメンバーからは、「国連大学を知ったきっかけは何か」「日本で困っていることはないか」「ベトナムの洪水の状況は」「日本の食事はどうか」などの質問が矢継ぎ早に飛び交い、和やかな歓談が続きました。学生からも「ロータリークラブの人たちの会合に参加して是非とも交流をしたい」等の希望も。

続いてエリザベス・ローズホール、ウ・タント国際会議場、UNU ライブラリーを見学。最後に、メディアセンターに赴き、ブレンダン・バレット所長からセンターの業務の説明を受けた後、メディアセンターが制作した環境問題をテーマにしたビデオを視聴し、キャンパス見学は終了しました。

■ トヨタの自動車工場を見学

大手自動車メーカーのトヨタ自動車株式会社は、国連大学協力会の jfScholarship 特別賛助会員として、JFNU 並びに UNU へ多大なご支援をいただいている企業ですが、6 月 28 日、同社のご好意で愛知県豊田市にあるトヨタの自動車工場を見学し、UNU-ISP の学生 14 人が日帰り出掛けました。

一行は国連大学本部に集合後、JR 渋谷駅から品川駅へ向かい、新幹線のぞみ号に乗って、一路名古屋駅へ。そこでトヨタ自動車渉外部第 2 渉外室主査の藤井郁乃さんと合流、マイクロバスを駆って豊田市の堤工場に午後 1 時前に到着しました。

堤工場では、専任のスタッフが待ち受けていて工場内のラインの仕組みや作業内容を英語で説明してくれました。カムリやプリウスなど同社の自動車があつらなみにラインを流れてきて、99%オートマチックによる部品が自動車に装着される工程。トヨタが誇る「かんぱん

方式」も目の当たりにしました。ここで1時間程作業工程を見学した後、再びマイクロバスに乗り込んで、今度はトヨタ会館へ向かいました。

トヨタ会館は、スポーツカーからセダン型乗用車、ワンボックスカーなど同社の発売しているすべての自動車群が展示されています。それ以外にもバーチャルファクトリーや安全シミュレーション、モータースポーツやエコカーへの取り組みなど、同社の技術の粋を尽くした自動車開発の最先端の様子が紹介されていました。



その後、会議室でトヨタ自動車株式会社より冠奨学金 (Toyota Scholarship for UNU) を受給しているガーナ出身のヤウ・アジェマン・ボアフォさんからお礼状が藤井さんに手渡された後、質疑応答へ。学生たちからは、熱心な質問が数多く出された後、一行は帰路へ就きました。

■ jfUNU レクチャーシリーズ7を発刊

国連大学協会では、昨年2月に東北大学、国連大学との共催により、「グローバルセミナー東北 震災復興と生態適応 ～国連生物多様性の10年とRIO+20に向けて～」を開催しましたが、このたびその内容を編集・収録した上で、「jfUNU レクチャーシリーズ7」(武内和彦・中静透編 国際書院)として出版いたしました。

ご希望の方に本書を送料とも無料で差し上げます。お申し込みは、氏名、住所、電話番号を明記のうえ、E-mail jf@unu.edu か FAX 03-5467-1349。先着3名まで。
<編者はしがきより>

2011年3月11日に発生した東日本大震災により甚大な被害を受けた地域の復興は、国際的な関心事となっています。津波から人命を守る防潮堤の早期復元、イン



フラの整備、復興住宅の建設など、街づくり計画が急ピッチで進められていますが、そこに住む人々の願いは「営みの復興」にあります。世界有数の漁場および農地を保有する東北地域の豊かさは生物多様性により支えられてきました。その回復を促すことが、より確かで持続可能な復興に欠かせません。またこれらの自然の恩恵による歴史的、文化的価値は大きく、この地域の人々の暮らしと街づくりの根幹となっていました。

そこで本シンポジウムでは、まずはじめに基調講演者としてスウェーデンを環境先進国へと導いた立役者の一人であるトルビョーン・ラーティ氏を招いて、持続可能な復興の原則についてお話しいただきました。ラーティ氏は、ご自身が中心となって取り組んだスウェーデンや他の国々におけるエコ自治体運動について詳しく紹介し、その実践経験からこの運動を推進するためのコンセプトを述べた上で、東北地方の将来展望について言及されました。

続く課題提起では、岩手大学の藤井克己学長、東北大学大学院の今村文彦教授、国連大学の武内和彦副学長よりそれぞれの専門の立場から、被災状況を細かく分析しつつ、従来のシステムを見直したうえで社会の多様性を活かした仕組みづくりや新たな視点による津波対策と街づくり、里山里海の再生を通じて自然共生社会と結びついた震災復興のあり方などが提案されました。

さらに第3部のパネルディスカッションでは行政の方の参加も交え、復興へ向けた取組みの進捗状況や今後の施策が報告されたほか、コミュニティを主体とした地域資源経営や歴史文化をめぐる多様性の危機など多角的な観点から震災復興と生態適応というテーマに考察を加えています。

震災から復興への道のりは長期にわたり粘り強い支援と多くの関係者の英知が必要とされます。本書が、都市計画、防災、土木建築、産業復興に関わる企業や学術関係者をはじめ自治体、NPO/NGO、一般市民の皆様へ分かりやすい話題を提供し、復興に向けた提言の一助となることを願ってやみません。

UN   公益財団法人 国連大学協会
〒150-8925 東京都渋谷区神宮前 5-53-70
TEL 03-5467-1368 FAX 03-5467-1349
URL <http://www.jfunu.jp/> E-mail jf@unu.edu

jfUNU では賛助会員を募集しています。
詳しくはウェブサイトをご覧ください。

国連大学協会

検索

UNUアクティビティレポート

● メキシコのペニャ・ニエト大統領を迎えて ウ・タント記念講演会を開催

4月9日、メキシコ合衆国のエンリケ・ペニャ・ニエト大統領を国連大学本部に迎えて、第21回ウ・タント記念講演が開催された。ペニャ・ニエト大統領は講演で、対話と団結力による問題解決を推進する国としてその地歩を固めることにより、メキシコがどのようにして国際国家としての重要な地位を高めてきたかに重点を置いて語った。

メキシコはこれまで4回にわたって国連安全保障理事会の非常任理事国に選出され、前回の任期（2009～2010年）には、紛争の防止と解決への役割強化に対する積極的貢献、人権および国際人道法の促進と保護活動の拡大、さらに理事会の透明性の向上によって、重要な役割を果たした。そのような努力を通し、メキシコはますますその正統性を確固たるものとしており、それによってラテンアメリカで生まれつつある統合の取り組みを力強く支持している。本講演会は、2012年12月にペニャ・ニエト氏が大統領に就任後、アジアへの初の公式訪問中に開催され、またメキシコと世界の関係について語る、初の海外講演会となった。

● マローン新学長が日本記者クラブで記者会見

4月18日（木）、デイビッド・マローン国連大学新学長は、東京の日本記者クラブで日本人記者と会見した。

マローン学長は通訳を介し、日本の主要紙の記者をはじめとした20名を超える聴衆に向け、国連大学の概要と、国連大学が東京に設立されたことが国連大学にとってだけでなく、なぜ日本のためにも有益であるかについて説明した。また、国連大学本部はおよそ40年にわたり東京を拠点にしてきたものの、日本の一般の人々の間での「知名度はまだ低い」ことを認識していると述べ、これは一部には、これまで国連大学が、日本語のメディアよりも英語のメディアを優先させる傾向にあったことによるものだとし、今後は変えていく考えを示唆した。

マローン学長は、国連大学の歴史を簡潔に述べた後、グローバルな国連大学のシステム、その活動の中心、国連大学のガバナンス構造について説明。また、2010年に開始された国連大学の大学院教育プログラムについても話した。さらにマローン学長はその就任にあたり、潘基文事務総長およびユネスコ事務総長より、国連大学の活動を国連のニーズとよりいっそう関連づけていくことを求められたとして、「今後、国連大学は政策に役立つ研究にのみ取り組み、国内外の、また国連加盟国の政策開発に役立たない場合には、その研究を行うべきではない」と述べた。

● UNU-ISP と UNU-IAS の統合を検討中と発表

国連大学は6月、今後1年間で、日本にあるふたつの研究・研修センター、国連大学高等研究所（UNU-IAS）とサステナビリティと平和研究所（UNU-ISP）の統合に向けて準備を進める予定であることを発表した。

これらふたつの研究所の統合は、2013年4月の国連

大学の最高意思決定機関である国連大学理事会第59回会合で承認され、2014年6月までにこの統合を完了することが予定されている。これにより誕生する新しい研究所は東京の国連大学本部（渋谷区）に拠点を置くことになる。今回の統合の公式発表に先立って、デイビッド・マローン国連大学学長は2つの研究所のスタッフと会合を持ち、統合のプロセスと理由について「統合により、運営が効率化し、UNU-IAS と UNU-ISP の研究者また教職員にとってより充実した統合的環境での連携が可能になる。同時に教育プログラムの充実にもつながるであろう」と述べた。

また2014年半ばまでには、サステナビリティ・開発・平和学修士課程（UNU-ISP）と環境ガバナンス生物多様性学修士課程（UNU-IAS）の2つのプログラムの統合も予定されている。統合により、設備維持費そして学術支援制度の両面において相当程度の節約効果が期待されるとしている。

● TICAD V：国連大学のサイドイベント／ 野口英世アフリカ賞受賞記念講演

5年に1回開催されているアフリカ開発会議（TICAD）は、アフリカの開発の推進に向けたアジアとアフリカ間の協調的活動のための主要な国際的枠組みになっている。第5回会議となるTICAD Vは、2013年6月1日から3日まで、横浜にて開催された。

この会議は、事前にTICAD共催者が決定した各国政府や国際機関等を対象としているが、パシフィコ横浜「アネックスホール」で開催される多くの公式サイドイベント等は、一般公開された。国連大学では、5月31日から6月4日まで横浜で6つのサイドイベントおよび東京で2つのTICAD関連イベントを行った。

6月4日14:30-16:30には、国連大学本部において野口英世アフリカ賞受賞記念講演が、内閣府、国連大学および日本学術会議の共催で行なわれた。日本政府により2006年に創設された野口英世アフリカ賞は、アフリカにおける感染症や、その他の疾病に関する問題を解決するための医学研究と医療活動の2つの分野において、著しい成果を挙げた人物へ授与される。

医学研究分野の受賞者であるピーター・ピオット博士（ベルギー）は、HIV／エイズとエボラ出血熱をはじめとして、クラミジア、結核および淋病を含む、アフリカ大陸の多くの地域に存在する疾病についての中心的な研究を行った。現在はイギリスのロンドン大学衛生・熱帯医学大学院の学長として活躍している。一方、医療活動部門の受賞者であるアレックス・G・コウティエノ博士（ウガンダ）は、HIV感染者が治療を受ける機会を増やす先駆的な活動が受賞理由となった。現在はウガンダのマケレレ大学感染症研究所の所長として活躍している。

当日はふたりの基調講演が行われた後、聴衆から、包皮切除による健康への効果をめぐる賛否両論の議論から、ポストミレニアム開発目標の策定においてグローバルヘルスから重点が移る可能性まで、幅広いトピックに関して質疑がなされた。